臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成27年(2015)新春号

校歌合唱　百年の時間(とき)を経て、蘇った世界の名器・母校のベーゼンドルファー社製ピアノが修復成って平成２６年１０月１１日、さくらんど会館に於いて在校生、卒業生、一般市民合わせて７５０名の参加を得、記念演奏会が開催された。演奏は佐藤峰雄（高２回）新潟大学名誉教授と世界的演奏者である田中幸治氏（新潟大学准教授）お二人の独奏と連弾に心から堪能し、ベーゼンドルファーの音色に酔い痴れていた。終わりに村松合唱団が出演し、最後の校歌は大合唱になって会場は大いに盛り上がった。　撮影・石黒勝夫（高１４回）

新潟県立村松高等学校東京同窓会　No. 56

「感動・チャレンジ・夢実現」

―おもてなしのこころ・松高復活のこころ―

東京同窓会会長　金子鶴男（高５回）

新春を寿（ことほ）ぎ謹んで御祝詞を申し上げ、皆様のご多幸とご健勝をご祈念いたします。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。今期のキャッチフレーズは「感動・チャレンジ・夢実現」です。それぞれ松高復活の心です。

感動　２０２０年東京五輪誘致に瀧川クリステルさんの「おもてなし」と表現したことが５年後開催の決め手となった最終プレゼンテーションでした。ただこれが東京の勝利を決めた全てではない、開催地を決める最後のアピールの場で、当時東京は東日本大震災からの復興などを開催意識に加え「情熱」に訴えました。瀧川クリステルさんは流暢なフランス語で日本の「おもてなし」を紹介、マドリード優位との下馬評を覆し、国際オリンピック委員会（IOC）の心を掴みました。それはスポーツ界も政界も財界もそれぞれ一生懸命動いていましたが、最後は一つになった「オールジャパン」の勝利と言えよう。「おもてなしの心」は茶道にあり、見知らぬ人でも手厚く優待し、歓待する「気遣いの心」や「思いやりの心」とも言えます。

直木賞作家の山本兼一作「利休にたずねよ」が映画化されました。安土桃山時代に侘び寂びの茶を完成させた茶人・千利休を主人公に彼の芸術的原点と秀吉に切腹を命じられた理由を大胆に推理します。自分の美意識に絶対的な自信を持つ利休の内面を主演者が凛とした佇まいで映し出す演技が強く印象に残っています。

茶道には利休七則、和敬静寂、一期一会と云う茶道の席でおもてなしをする際の心構えを説く大切な言葉があります。それらは全てその場、その時間、そこに会する人たちを最高の舞台へと導く演出をするために、あらゆることに心遣いを尽くして感動を与えるのです。

５０年前の東京五輪から二度目の開催が決定されました。松高も往年の名門校へと「復活の心」を燃やし、大いなる「感動」を期待しています。

チャレンジ　平成２５年、本部同窓会は中高一貫プロジェクトチームを立ち上げました。荒木快英会長は少壮にして教育界に入られ、一意専心教育に従事され永年学校経営指導や児童生徒の訓育に優れた功績を上げられています。また教育委員会在職中は市町村学校を総括指導され大いに功績を残されました。会長の下、中高一貫校の実現を心より願っております。要請文中、「松高は県下でも一流の中高一貫校になれる要件を持っている。」とあります。光輝と伝統・往古（むかし）の松城健児魂を奮い起こし「チャレンジ」精神で実現させましょう！

夢実現　夢とロマンを胸に２年計画でスタートした「ベーゼンドルファーのピアノ復活運動」は、全国規模の同窓生と賛同者８６０名のご協力により１年で補修金額に達しました。マスメディア各社のご支援も大きく、改めて感謝と御礼を申し上げる次第です。

また匿名でご芳志を寄せられた方のコメントは胸に響きました。「私は松高の卒業生ではございませんが、毎朝、村松駅から大勢の生徒さんが賑々しく登校された様子を懐かしく想い出します。これからも是非、あの通学風景の再現を期待しております。些少でございますがお役にたてれば嬉しいです」と心温まるご支援に感謝です。

去る２６年１０月１１日、村松さくらんど会館に於いて「ベーゼンドルファーピアノ修復記念演奏会」が催され、在校生や関係者７５０名ほどが出席して「百年の時間を経て甦った名器」の音色に絶賛と感嘆の嵐でした。また合唱団も素晴らしく最後の校歌合唱はいつまでも想い出に残っています。

アンケートにも熱い想いが満ちて「素晴らしく甦ったベーゼンの響きは凄い限りでした。老大家となられた佐藤峰雄先輩と若き大家田中幸治先生のお力により感銘を新たにし、特に連弾演奏は圧巻でした。また合唱もピアノの響きとマッチして良い演奏でした。多謝！」（高２６年卒・群馬県）「大変感激しております。素晴らしくなったピアノに初めてお目にかかれて嬉しく思います。喜びで一杯です。ありがとうございました。」（高女２２年卒・五泉市）「私は村松高女からベーゼンドルファーと一緒に松高へ引っ越しました。今日、佐藤峰雄先生の演奏を聴き、相変らず美しい音色に聴き惚れました。感謝々々」（高２６年卒・新潟市）「ベーゼンの音色豊に響き渡り素晴らしかったです。私はこんな素晴らしいピアノとも知らず弾かせて頂き、当時以上に美しく本来の音色に蘇り、お二人の演奏に心から感動いたしました。こんなに甦ったピアノ修復を呼び掛けた東京同窓会の皆様ありがとうございました。」（高２８年卒・田上町）「とても美しい音色です。お二人の連弾に感動しました。とても歴史ある学校ですネ！こんな素晴らしいピアノ誇りですネ！息子が野球部でお世話になりました。」（卒業生父兄）「こんな素晴らしい音色のピアノが修復し、感動・感謝です。東京同窓会の方々修復本当にありがとうございました。」（一般・新潟市）「素晴らしい至福のひと時をありがとうございました。一過性でなく、生徒の健全な育成や町興しの一助になればと思います。」（高４１年卒・埼玉県）

以上多数のアンケートの一部を紹介しました。

東京同窓会から名器修復を、そして基金立ち上げに取り組んだことは、同窓生だけではなく多くの関係者から賛同されご理解とご協力ご支援を得ました。これは永遠に校史に残されるものと存じます。

新年明けましておめでとうございます

平成２６年６月７日に開催された総会に於いて、新役員が承認されましたので下記の如く組織と共にお知らせ致します。役員一同、２年の任期を全力で全う致したく、会員の皆様には倍旧のご協力を切にお願い申し上げますと共に、皆様方におかれましても益々ご健勝にてご活躍されますよう心から祈念申し上げます。

新役員・新体制（平成２６年６月７日）

役職名	氏　名　（敬称略）		
顧　問	佐伯　益一（中２７）、篠川　恒夫（高２）、渡辺　八郎（高３）、鈴木　多喜男（高４）		
会　長	金子　鶴男（高５）		
副会長	総括・総務担当	財務担当	広報担当
	山﨑　輝雄（高８）	石黒　四郎（高９）	大橋　貞夫（高１０）
事務局長	吉井　清（高８）		
次長	斉藤　正義（高１８）	局員　林　信子（高２５）	
会計監事	片柳　ムツ（高８）	高岡　五百子（高１２）	
委員会	総務委員会	財務委員会	広報委員会
委員長	熊倉　道雄（高１４）	徳永　道子（高１２）	大橋　貞夫（高１０）兼務
副委員長	佐藤　赳　（高１２）	野平　茂子（高１９）	鈴木　長五（高１５）
委　員	郡司　正大（高１６）	松澤　綾子（高２２）	石黒　勝夫（高１４）
	平山　誠一（高２２）		高岡　光夫（高１５）
	永田　毅　（高２３）		武藤　達家（高１９）
	福田奈保子（高２３）		塚野　ミイ子（高１９）
			安中　信夫（高２０）
			石井　清和（高２０）
			阿部　モヨ子（高２２）
	＊常任幹事兼務		高塚　あつ子（高２２）

ご挨拶　　副会長　**山﨑　輝雄**（高８）

謹んで新春のお祝いを申し上げます。

東京同窓会に対し、会員の皆様には日頃より種々お力添えを賜り、心底より御礼を申し上げます。役員一同、会の更なる発展には、いろいろと心を砕いて参りましたが、会員の高齢化とともに会員数の減少も目立ちはじめて来ました。

有意義で楽しい会にするためには、是非とも若手の会員増が望まれます。これからも、お知り合いをお誘い頂き、当会の発展にご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ご挨拶　　副会長　**石黒　四郎**（高９）

あけましておめでとうございます。

このたび、財務担当の副会長を務めることになりました９回卒の石黒でございます。ここのところ逼迫しております財務の責任を負うことは、大きなプレッシャーでありますが、解決策としては会員増と会費納入率の向上が考えられます。

何れに致しましても、会員の皆様には絶大なるご協力を賜りますようお願い申し上げますと共に、皆様方とご家族様のご健勝をお祈り致します。

ご挨拶　　副会長　**大橋　貞夫**（高１０）

新春のお慶びを申し上げます。この度、広報委員長の兼務を仰せつかりましたが、皆様のご寄稿無くして広報の職務は成り立ちません。どうか日頃より各種情報に留意されて、ご寄稿の程よろしくお願い申し上げます。

E-mail：sadao-o@gb4.so-net.ne.jp

事務局から

新年あけましておめでとうございます。昨年６月７日に開催された第５７回定期大会で、引き続き事務局長を仰せつかりました吉井清と申します。

半世紀以上の歴史を持つ当会が、昨年来取り組んで来た事業も順調に推移しております。同窓会事業の本分は母校とのコミュニケーション、会員相互の親睦を図り母校の発展に寄与すると謳っております。

東京同窓会の明日は、若い会員の一人でも多い参加と、その新しい会員の斬新な感覚により、新しい運営が急がれているところです。

是非、となりの未加入会員をお誘い戴き、先ずご一報を事務局にご連絡の程よろしくお願い申し上げます。

Tel・Fax：　042－527－6482

Eメール：kiyoshi441@kdn.biglobe.ne.jp

平成２５年度 収支決算報告書

(平成25年4月1日から平成26年3月31日まで)

同窓会運営の基盤である年会費収入は、僅かながら前年度を上回りました。一方、支出につきましては引き続き全費目について経費の節減に努めましたが、約３万円の赤字決算となりました。 ２４年度からの繰越金でこれを補い、２６年度への繰越金は約１０万円に減少し、依然として厳しい財政状況が続いています。

費　　目		決　算　額	備　　　考
収入	会　費	1,347,000円	
	（年会費	603,000円）	201名分の会費
	（大会費	744,000円）	第56回大会出席者93 名分の会費
	寄付金等	113,000円	
	本部助成金	30,000円	
	雑収入	40円	
	合　計	1,490,040円	
支出	大会費用	919,832円	第56回大会経費(詳細は26年新春号に掲載)
	会議室借用費	80,980円	幹事会（８回）、各委員会等（３回）開催
	広報活動費	247,714円	「会報」発行関連費、ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ運用費他
	通信費	41,380円	はがき代、郵送代他
	渉外費	107,597円	本部同窓会出席、県人会賛助会費他
	諸雑費	122,608円	封筒作成費、振込手数料、ｺﾋﾟｰ代、消耗品
	合　計	1,520,111円	
収支差金　(A)		-30,071円	

前年度繰越金　(B)	132,835円	24年度からの繰越し
次年度繰越金［(A)＋(B)］	102,764円	26年度への繰越し

決算は監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

平成２６年５月２４日　　会計監事　片柳　ムツ
高岡　五百子

以上のとおり、ご報告いたします。

平成２６年６月７日　　会　長　金子　鶴男

平成２５年度　寄付者及び寄付金額（敬称略）“まことにありがとうございました”

５０，０００円	村松高校同窓会御祝儀
９，０００円	山﨑輝雄
５，０００円	佐伯益一、吉井　清、今井英雄
４，０００円	徳永道子
３，０００円	斎藤正義
２，０００円	武藤三郎、篠川恒夫、川合敏男、渡辺八郎、金子鶴男、佐藤良平、畔田昭義、塚田　勝、片柳ムツ、石黒四郎、大橋貞夫、真水道子 高岡五百子、佐々木秀三、武藤正昭、緒方康子

寄付者２３名　　合計金額　１１３，０００円

平成２６年度　東京同窓会事業計画

【一般事業】

随　　時	会員名簿・幹事名簿等の加除修正発行及び保管（総務委員会）
６月　７日	平成２６年度定期大会の開催　　会場・ホテルグランドパレス（全会員）
８月２３日	本部同窓会総会への出席（全会員）
２月　　日	東京同窓会会報誌　新春号（NO５６号）の発行（広報委員会）
２月　　日	東京同窓会２７年度予算・２６年度決算の策定（財務委員会）
随　　時	東京同窓会ホームページの更新管理（広報委員会）
随　　時	東京同窓会の運営に伴う会則の改正（総務委員会）
随　　時	東京同窓会幹事及び会員等研修会の企画立案（総務委員会）
随　　時	他校同窓会との交流等意見交換会の企画（総務委員会）
随　　時	東京同窓会所有物品の整備及び管理保管（財務委員会）

【特定事業】

随　　時	母校のピアノ修復基金の会の運営（全会員）
随　　時	「甦れ　松高！」　母校の発展を考える会運動の立ち上げ（総務委員会）
随　　時	東京同窓会の広報宣伝及び会費増収手法の研究（広報・財務委員会）

平成２６年度収支予算書

（平成２６年４月１日から平成２７年３月３１日まで）

会員の高齢化が進む下で新入会員の勧誘に努め、同窓会運営基盤の強化を目指します。年会費収入を６３万円と見込む一方、支出面では依然として厳しい財政状況が続いていること、更に消費増税に支出増加を踏まえ、一層の経費節減に努めます。この結果、収入と支出の差６万円の黒字を計上し、２５年度からの繰越金（見込み）と合わせ、２７年度への繰越金を１６万円と見込みます。

	費　目	予 算 額	備　考
収入	会　費	1,430,000円	
	（年会費	630,000円)	新入会員の勧誘を推進
	（大会費	800,000円)	第57回定期大会会費
	寄付金等	50,000円	
	雑収入	1,000円	預金の利息等
	合　計	1,481,000円	
支出	大会費用	875,500円	第57回定期大会経費
	会議室借用費	70,040円	常任幹事会、幹事会、各委員会の開催
	広報活動費	216,300円	「会報」発行、ホームページ運用
	通信費	41,200円	はがき・切手代、宅配便等
	渉外費	103,000円	本部同窓会の出席、県人会賛助会費
	諸雑費	61,800円	振込手数料、コピー代、消耗品等
	予備費	50,000円	
	合　計	1,417,840円	消費増税３％分が含まれている
収支差金　(A)		63,160円	
25年度からの繰越額 (B)		102,764円	
27年度繰越見込額［(A)＋(B)］		165,924円	

村松高校　東京同窓会・第５７回大会報告

広報委員　石黒　勝夫（高１４）

６月７日（土）、千代田区飯田橋のホテルグランドパレスにおいて第５７回定期大会が開催された。来賓として同窓会本部の荒木快英会長、母校から着任早々の今西博一校長ほか３名、更に今年から交流を始めた長岡工業高校同窓会東京支部から４人の役員を迎えて９０人ほどが集結し、熊倉道雄・塚野ミイ子両幹事の司会で進行した。

第一部総会は、山﨑輝雄大会実行委員長の開会宣言で幕を開け、金子鶴男会長の挨拶の後、荒木同窓会長、今西校長、星野副支部長（長岡）からご祝辞をいただいた。この後、総務・財務・広報の各委員長から１年間の活動報告、続いて金子会長の再選等を承認。最後に、ベーゼンドルファーのピアノ修復基金の中間報告と修繕費の半額（２００万円）を目録にして本部へ移管し終了。

第二部の講演会は、小池生夫先輩（高３、慶応義塾大学・明海大学名誉教授）の「英語教育あれこれ」と題した日本の英語教育の歴史と今日のグローバル人材育成のために英語教育の必要性と重要さを話された。小学３年から英語を学ぶことが如何に大切であるか熱弁を振るわれ、出席者一同深く共鳴。

第三部の懇親会は、卒寿を迎えられた佐伯益一顧問に会より花束を贈呈し、同顧問の乾杯でスタート。恒例となったお楽しみ抽選会も加わり、会は賑やかに進んだ。校歌・応援歌で大合唱の中、最後は、篠川恒夫顧問の手締めで閉会となる。記念のマフラータオルを手に、出席者は晴れやかな顔で再会を約し散会した。

東京同窓会・第５７回定期大会収支報告書

平成２６年６月７日（土）：ホテル　グランドパレス

収入の部（単位：円）		支出の部（単位：円）	
①会費　74名（×8,000）	592,000	①懇親会費	653,400
②会員寄付金	44,000	②講師謝礼等	60,800
③同窓会本部祝儀	50,000	③同窓会本部対応費	41,384
④長工同窓会東京支部	50,000	④通信費（案内状、ハガキ、切手）	48,427
		⑤諸雑費（資料代、機器使用料等）	19,186
収入合計	736,000	支出合計	823,197
（一般会計から補てん）	87,197		
総　　計	823,197	総　　計	823,197

司会の熊倉、塚野両幹事

会場風景

乾杯！佐伯顧問

校歌・応援歌の熱唱

小池先生へ花束贈呈

中締め・篠川顧問

第57回 東京同窓会出席者名簿

平成26年6月7日（土）　於 ホテル グランドパレス 3F「白樺」　新潟県立村松高等学校東京同窓会

来賓・他（１１名）	旧中学校	高　校	高　校	高　校
村松高校同窓会	２７　佐伯　益一	０８　岡部　ユキ	１３　金子　健二	１９　五十嵐 勝栄
会長		０８　片柳　ムツ	１３　波多野 紀子	１９　石黒　久七
荒木　快英　様（高４）		０８　木村　孝子		１９　佐藤　知伸
	高　校	０８　久我　マキ	１４　石黒　勝夫	１９　塚野 ミイ子
村松高等学校校長	０２　大橋　秀雄	０８　塚田　勝	１４　伊藤　昌夫	１９　野平　茂子
今西　博一　様	０２　篠川　恒夫	０８　山﨑　輝雄	１４　落合 三枝子	
村松高等学校教頭	０２　真島　節朗	０８　吉井　清	１４　片山　徳子	２０　安中　信夫
早川　勝志　様	０２　丸山　貞次		１４　加藤　延雄	２０　阿部　慶子
	０２　梁取　正道	０９　阿部　勇	１４　熊倉　道雄	２０　石井　清和
村松高等学校事務局		０９　石黒　四郎	１４　斉藤　正克	
熊倉　洋子　様	０３　瀬倉　武志		１４　横溝 美枝子	２２　阿部 モヨ子
酒井　加代子　様	０３　長谷川五郎	１０　大橋　貞夫		２２　大橋　利光
	０３　渡辺　八郎	１０　新保　優	１５　鈴木　長五	２２　笠原　和夫
長岡工業高校同窓会		１０　宮沢　正由	１５　高岡　光夫	２２　瀧澤　義則
東京支部	０４　梶屋　庄佑			２２　濱田　守
顧問	０４　鈴木　健司	１１　佐藤　赳	１６　郡司　正大	２２　平山　誠一
並木　政治　様	０４　鈴木 多喜男			
副支部長			１８　青木　敏和	
星野　弘明　様	０５　金子　鶴男	１２　今井　英雄	１８　安中　幸男	２３　高倉　悦子
事務局長	０５　雲村　俊慥	１２　高岡 五百子	１８　岩野ハナヱ	２３　高橋　修子
大関　稔　様	０５　山崎　豊吉	１２　徳永　道子	１８　江口　浩市	２３　永田　毅
広報部長		１２　安部　實	１８　小出　益夫	２３　福田 奈保子
小高　洋　様	０７　加藤　喜七		１８　斉藤　正義	
	０７　宮川　裕皓		１８　高岡　英治	２５　林　信子
講演会講師			１８　平松　伸一	
小池　生夫　先生				出席者計８４名

ピアノ修復費用の移管

金子会長挨拶

荒木同窓会長挨拶

今西松高校長挨拶

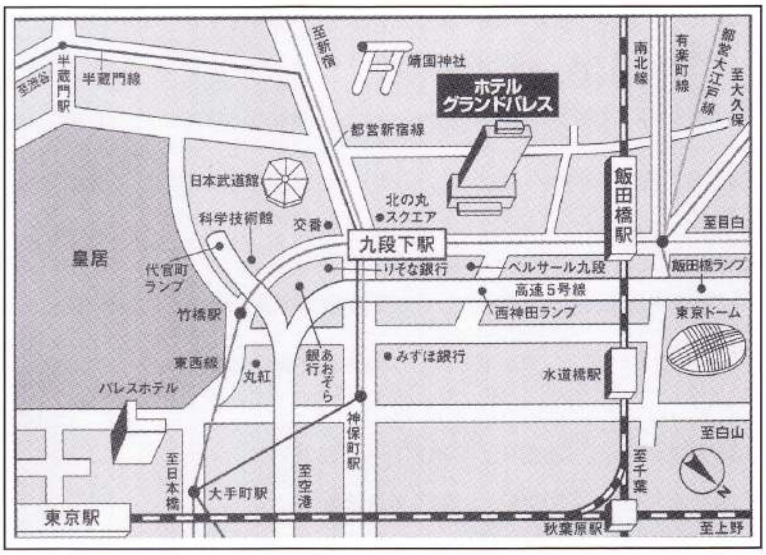
星野長工東京副支部長挨拶

平成27年度 県立村松高等学校東京同窓会開催のお知らせ

◆日時　２７年６月６日（土）
正午　開会
（第５８回定期大会）

◆場所　ホテル グランドパレス
千代田区飯田橋 1-1-1
TEL：03-3264-1111

交通　●地下鉄「九段下駅」
＊東西線７番出口より徒歩１分
＊半蔵門線・都営新宿線
３a出口より徒歩３分
●JR・地下鉄「飯田橋駅」より
徒歩７分



誇りを胸に

新潟県立村松高等学校　校長　今西 博一

新年あけましておめでとうございます。同窓会の皆様におかれましては、お元気に新しい年をお迎えのことと存じます。また、日ごろより母校・村松高等学校の教育活動に多大なご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

まずもって、昨年１０月１１日(土)に、村松高等学校と同窓会が主催し、「さくらんど会館」で開催した「ベーゼンドルファーピアノ修復記念演奏会」では、本部同窓会並びに東京同窓会の皆様方の絶大なるご支援により成功裏に終了することができましたことに心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。当日は、７１０席以上準備しましたが、一般席が不足し、最終的には７５０席程度になったとのことです。その内、本校の全生徒が約３００人ですので、来賓、同窓生、地域の方々など４５０人以上が来場されました。村松高等学校第２回生、新潟大学名誉教授の佐藤峰雄先生と同じく新潟大学教育学部芸術環境創造過程・音楽表現コース准教授の田中幸治先生による演奏後、村松合唱団の皆様方からも素晴らしい歌声を披露していただきました。昭和４年、当時の村松町立高等女学校に村松町が購入したベーゼンドルファーピアノが設置された後、学制改革等により村松高等学校に引き継がれました。同窓の皆様方の思い出がぎっしり詰まったベーゼンドルファー。まさに「１００年の時間(とき)を経て、今、甦る世界の名器の音色」であります。今後は、先輩方のベーゼンドルファーへの熱い思いを受け継ぎ、本校の宝物の一つとして音楽の授業等で大切に使わせていただきたいと考えています。

今年度の村松高等学校の様子を報告させて頂きます。平成２６年度入学者選抜状況は、募集学級３学級、募集定員１２０人のところ１１６人でありました。全校生徒３０６人で平成２６年度はスタートしました。平成２７年度募集学級数、募集定員ともに変更はありません。地域に密着した高等学校として、地域の皆様方に信頼され、慕われる学校として、更に情報を発信していきたいと考えております。

現３年生の進路状況は、８３人の在籍者数のうち、大学・短大・専門学校等の進学希望者が４４人(５３%)、就職希望者が３９人(４７%)となっております。進学希望者の内、国公立大学を目指している生徒も複数名おり、センター試験受験者は１５名と、近年になく多い数字であります。創立１００周年記念事業で設置していただきました各教室のエアコンにより、各自の進路実現に向けて非常に大切な時期である３学年の夏季休業中に進学補習や就職対策等を快適な教室で指導することができるようになったお陰であると感じています。今後も、生徒一人一人の進路希望を確実に実現するためにとことん面倒を見る学校として教職員一丸となって取り組んでまいりたいと考えております。

部活動も活発に取り組んでいます。昨年７月に開催されました「第９６回全国高校野球選手権新潟大会」１回戦において、村松高校 対 新井高校は延長１５回、５対５で引き分け、再試合となりました。実は、平成１２年に高野連の規定が延長１８回から１５回に短縮されて以降、同大会では初めての引き分け・再試合であり、新聞各紙を賑わせました。翌日の再試合は１０対２、７回コールドで勝ちを収め、本校のエースは２日間で３４８球の力投でありました。残念ながら２回戦で敗退しましたが、粘り強く戦い、再試合を制したことは素晴らしいことであります。サッカー部も昨年８月下旬に開催されました「第９３回全国高校サッカー選手権新潟大会」１回戦で、柏崎常盤高校を８対２で勝利し、続く２回戦では、敬和学園高校に２対３と惜敗でありましたが、日ごろの練習の成果が出てきており、確実にレベルは向上していると感じています。また、昨年１０月中旬に開催されました「第６７回県縦断駅伝競走大会」において五泉チームの一員として本校陸上競技部員１名が選出され、第１１区９．４キロを走っております。この他の運動部・文化部ともに積極的に活動しており、充実した学校生活を送っています。

母校・村松高等学校は平成２７年度で１０４年目を迎える歴史と伝統ある学校です。現役の生徒たちも、前述いたしましたように各自の進路実現に向けて、学習活動に、部活動に一生懸命取り組んでおります。

本校の正面玄関前に創立１００周年記念事業で建立された記念碑があります。正面には「誇りを胸に」と大きく刻まれており、その裏面には「記念碑建立に向けて」として「創立以来培われてきた『誠を尽くし、志をたて、必ず実行する』という松城精神が先輩から後輩に受け継がれている。このように母校は、人材の育成に努め、数多い俊才を世に送り出し、百年の歴史の中で、名門の名を天下に轟かせてきたことを誇りに思う」とあります。私はこの言葉が好きです。生徒たちには何か話をする機会があるごとに松城精神の話をします。

この松城精神を受け継ぎ、「誇りを胸に」活躍してくれる有為な人材の育成に、教職員一同結束して努めてまいりたいと思っておりますので、今後ともなお一層のご厚情を賜りますようお願い申し上げ、同窓会の皆様方の益々のご健勝とご発展を祈念いたしまして、新年のごあいさつとさせていただきます。

母校・村松高校の主な動き

石黒　勝夫（高１４）

平成２６年度（７月～３月）

７月

○ **第９６回全国高校野球選手権新潟大会で、村松高校は初戦で新井と延長１５回引き分けに**

１回戦　村松高校５―５新井高校（１５回引分け）
再試合　村松高校１０―２新井高校
２回戦　村松高校０－１３新潟産業大付属高校
劇的な再試合勝利だったが、次戦は疲労から５回コールドであった。来年の活躍に期待したい。

○ **職場・上級学校見学**

１年全員で、地元優良企業と大学、専門学校などを見学し、進路について知識を深めた。

８月

○ **インターンシップ体験（２年生）実施**

７月下旬から８月上旬まで、地元優良企業で、２年生全員が３日間の職場体験を行った。

○ **３年進学補習**

夏休みの２８日から、進学向け補習を実施。

○ **県立万代島美術館で近藤喜文展開催**

本校ＯＢのアニメーター故近藤喜文氏の展覧会が開催され大盛況。本校ＰＴＡ役員も見学した。

９月

○ **中学生体験入学（２６日（金））**

本校志望の中学３年生を対象に、授業見学や体験入部等を実施し、松高の魅力をＰＲした。

１０月

○ **マラソン大会（２日（木））**

伝統のマラソン大会で、参加生徒全員が完走した。

○ **ベーゼンドルファーピアノ演奏会（１１日（土））**

同窓会員の尊い志で修復された貴重なピアノの修復記念演奏会を全校生徒・職員が拝聴した。

○ **臥龍祭（１８日（土））**

秋晴れの下で、多くの催しや食品販売を実施。ＰＴＡも模擬店を出し協力した。

１２月

○ **２学年修学旅行（沖縄）（１１月３０日（日）～１２月３日（水））**

１月

○ **始業式・頭髪服装検査（７日（水））**

３月

○ **第６７回卒業式（３日（火））**

平成２６年度の本部同窓会総会に出席して

石黒　勝夫（高１４）

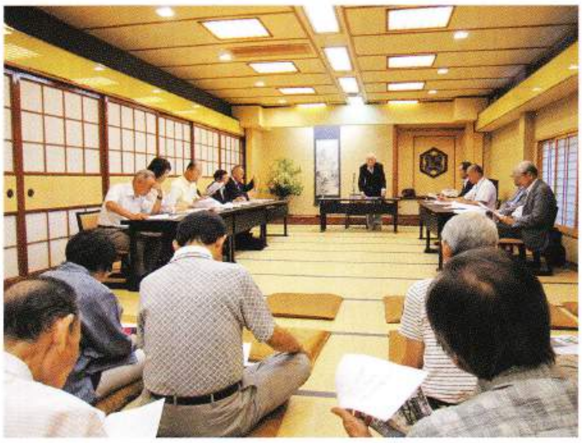
母校村松高校の本部同窓会総会が８月２３日（土）、午後５時から五泉市村松城町の割烹　新瀧で開催され、金子鶴男会長、大橋貞夫副会長と共に出席しました。なお、斎藤正義幹事、青木敏和元幹事も一般参加をしました。

本部の荒木快英会長の挨拶では、中高一貫校取組みの経過と昨年から本部と東京同窓会が取り組んでいる「ベーゼンドルファーのピアノ復元基金」の募金状況（８６０名から６２５万６千円）の報告があり、ピアノの修復記念演奏会の開催予定（１０月１１日（土）、会場・さくらんど会館）と、アニメ画の故近藤喜文氏（高２０）の展覧会開催のお知らせがありました。

東京同窓会の金子会長からは、長岡工業高校との交流会の取組みと同窓生雲村俊慥氏（高５）の出版祝賀会の報告のほか、同氏の文化協会主催による講演会（１１月８日（土）、五泉図書館にて）のご紹介をされました。

４月１日付けで着任された村松高校の今西博一校長からは、ピアノ修復記念演奏会には全校生徒が出席すること、ピアノは今後授業中心に活用したいことのほか、学校の近況報告がありました。

総会にて金子会長の挨拶



本部の議案には、定例的な事業報告・決算報告、事業計画・予算案のほかに、上記「ベーゼンドルファー」ピアノ修復記念講演会の開催と役員改選がありました。議案は滞りなく議決され、役員には副会長の阿部律雄氏が退任され、代わって日高太郎氏（高１４）と滝沢義則氏（高２２）のお二人が新たに副会長として選任されました。

なお、私からは、ピアノ修復記念演奏会に首都圏から記念演奏会観賞バスツアーを組んで、参加する予定である旨をご説明しました。

６時からの懇親会では、同窓会員のほか、遠くから参加された札幌松城会の今井順彌会長など、多くの方々と意見交換・懇親を深め、有意義なひと時を過ごしました。

シリーズ第３回　先輩こんにちは！　吉原 士朗さん（高２回）

滝沢 義則（高２２回）

五泉市川内に１５０４年に創建された曹洞宗のお寺、永谷寺（ようこくじ）があります。昭和７年、吉原さんは３人の姉と３人の兄を持つ七番目の子として誕生します。小学校に上がるまでは３人のお兄様と一緒にお坊さんの勉強をさせられましたが、それ以降は免除となります。３人いれば誰か寺を継ぐだろうとお父様は安心されたのでしょう。

昭和２５年、松高を卒業して早稲田大学文学部英文科に入学します。昭和２９年卒業。東京の区立中学校の先生としての働き口もありましたが、お母様はお姉様の住む京都を推奨したため、京都で中学校の英語の先生になります。昭和４０年、高校教諭として転勤します。大好きな英語を通して生徒との交流を深める毎日が続きます。しかし、定年も間近になった昭和６３年９月、一大事が発生します。永谷寺の住職御長兄の精英さんが病気となり、しかも御子息が寺を継がないことが判明したのです。吉原家の一大事に、二人のお兄様は士朗さんに寺の後継者として白羽の矢を立てます。吉原さんの御長男の結婚式に参列したお兄様、お姉様たちは、お祝いどころではありません。士朗さんを寺の後継ぎにしようと必死でした。５６歳にして高校教諭からお坊さんへの転身、そして京都から新潟への転居とあって、二人の御子息は反対します。しかし、奥様のお父様はこう伝えます。『夫婦であれば主人に付いて行くのが道だろう』と。奥様はお父様の助言に素直でした。『実るほど頭を垂れる稲穂かな』、『水が低きに就くがごとし』、『働くとは、端（はた）を楽にすること』、など、子供の頃から教えられてきた言葉を大切にしていたからです。お父様は短歌を詠み、百人一首を自作しスケッチもする方でした。そんなお父様が送ってくれた自作の“紙風船”を、奥様は『腰が痛くなったら本堂でこれをつきなさい』、の言葉と一緒に大切にされています。こうして士朗さんは教師を辞め、実家の寺を守るためお坊さんになることを決めます。

翌年２月に得度式が予定されます。「得度式」とは、師匠（受業師・じゅごうし）によって、髪を剃り落としていただき、衣（ころも）、袈裟（けさ）、坐具、応量器（食器、鉢盂・ほう）などの、僧侶が僧侶として生きていくために必要な最低限のものをいただく儀式です。髪を剃って教壇に立つのは恥ずかしいからと、近所の東映撮影所で“カツラ”を準備します。しかし、幸いにも剃らずに済みました。

昭和６４年１月７日、昭和天皇崩御。昭和から平成と年号が変わります。２月、得度式です。住職の御長兄が師匠を務め儀式は開始されます。しかし、途中で御長兄が倒れ、御次男が急遽師匠となり得度式を終了します。

３月１１日、御長兄死去。４月２日、士朗さん御夫妻は京都から永谷寺に到着します。１１日、士朗さんは坊主頭に網代笠、衣、袈裟、　素足に“わらじ”履姿で能登・総持寺（祖院）に向け半年間の修行に出発します。何も知らない士朗さんを、お姉様の御子息がいろいろ手助けされたそうです。そして、奥様は先代奥様と共に寺に残り、半年後の士朗さんのお帰りを待つことになります。

士朗さんは祖院にとって、２人目の５０歳を過ぎた修行者でした。最初の修行者には自殺説もあるほど厳しい修行で知られたところです。当時の修行者は１５名、全員２０代です。“叩かれ”“扱かれ”、“外との連絡もままならない”、本当に“涙の日々”でした。或るとき、旦過寮の余りの寒さに耐えかね、ストーブで暖を取っていたところを見つかり、若い先輩お坊さんにこっぴどく叩かれたことも。そして、不安、不平不満を募らせる修行者はいつしか士朗さんを“お父さん”と呼び、夜な夜な集まってくるようになったそうです。

２５年が経ちました。その間に人の子を育てるというもうひとつの難しい選択もされています。しかし、その甲斐あって養子東玄さんが寺を継いでいくことになっています。１０年が経った頃、寺が回り出してきたと実感されたそうです。檀家とともに生きる寺、親しみ持っていただける寺を目指しています。檀家も徐々に増えてきています。寺を守っていること、代々雰囲気を作ってきたことで檀家さんが来てくれることに幸せを感じると仰言います。また、京都から昔の教え子たちがわざわざ訪ねてきて、昔話に花が咲くとき本当に教師冥利に尽きるそうです。奥様もそういうご主人を尊敬し、幸せを感じますと仰います。士朗さんと奥様は自分の役割を明確に持ち、誠実に責任を持って果たしていらっしゃいます。

この度は、誠にありがとうございました。

いつまでもお元気で、お幸せに！

初めて知るインド

熊倉　道雄（高１４回）

若い頃、英語に“We live on the list.”という言い方があると聞いたことがある。直訳すると「人はリスト、つまり住所録の上で生きている」、人との縁を大事にせよということだったと思う。縁あって60歳半ばを過ぎてから、思いがけずソフトウェア開発会社の経営に関わることになり、今、何かと得難い経験をさせて貰っている。会社には、インド南部バンガロールの北西約70kmのトムクール市に現地法人があり、そうした関係で2011/2に初めてインドへ行った。その後、社用で4回渡印した。

バンガロールには、一度行きたいと思っていた。というのも、今ではインドのシリコンバレーとして知られるバンガロールは、独立後に初代首相ネルーが隣国パキスタンから遠く隔たったこの地に国防やハイテク分野中心に国立研究機関・大学・国営企業を集め、「インドの未来」と呼んで“知の首都”にしようとした都市だったし、また、ロンドンを起点にドバイ、バンガロール、シンガポール、シドニーを結ぶと、見事なまでに一直線になるが、いずれもかつて大英帝国の支配下にあった枢要な都市で、これが今なお世界に大きな影響力を持つ「ユニオンジャックの矢」と呼ばれる“見えざるネットワーク”であり、バンガロールがその要として注目されているからである。

バンガロールへは成田からクアラルンプール/バンコク/香港等で乗り継ぎ、正味約11時間半のフライト、トムクールは更に空港から車で1時間半の距離である。バンコクとほぼ同緯度であるが、海抜1,000mのデカン高原にあるので、年中、「夏の軽井沢」といった感じの快適さ、しかも、体に感ずる地震は有史以来一度もないという土地である。

行くたびにトムクール周辺をドライブするが、ハイウェイはともかく一般道は、車道部分のみの簡易舗装、しかも穴ぼこだらけ。街へ出れば、洪水のような人とトラックとバイク。けたたましいクラクション。至る所にある工事現場とゴミの山。身なりは貧しいが、明るく屈託のない子供たち。草食系とはおよそ縁遠い若い男女、等々。確かに、“生活水準”は低いのかも知れないが、逞しく成長するインド経済のエネルギーが否応なしに迫ってくる。少子高齢化が進む日本とは全く違う世界がそこにある。

周辺の観光にもそこそこ出掛けている。トムクールから車で4時間ほどの古都マイソール（インド独立まではマイソール藩王国の中心であった）では、かのマハラジャ宮殿に圧倒された。バンガロールでは、イギリス領となる以前の王国支配者の離宮や、かつては王族やその後の支配者イギリス人の避暑地であったナンディ・ヒルズを見物した。ただ、どこも駆け足。いつの日か、自由人としてじっくり見物してみたいと思っている。

インドに行くようになって、新たに知ったことも知り

マハラジャ宮殿を背にする筆者

たいと思うことも増えた。そうした中で、ここ数年で最も驚かされた、というか、心底感動させられたこと、それは、昨2013年の秋、「月刊インド」（公益財団法人日印協会の機関誌）で、インド連邦議会が毎年8月、日本の原爆犠牲者の追悼行事を行っていることを初めて知ったことである。上下両院それぞれ、広島、長崎の原爆の日のいずれかの日に、議長が審議に先立って追悼のメッセージを述べ、続いて全議員が起立して黙祷を捧げているというのである。それまで私は全く知らなかった。

ところが、この行事がどのような経緯で始まったのか関係機関に問い合わせたところ、1985年に始まったことだけは分かったが、その他の確かなことは何も分からず。インターネットで調べようとしても、当時の事情を知る手掛かりは報道資料を含めて何も掴めないのである。

これは一体どういうことなんだと、しばらくは心に引っ掛かるものを感じながら過ごしていたのだが、その年2013年12月の初め、国賓として訪印された天皇皇后両陛下の動静を報ずるテレビをたまたま観て、ビックリすると共に感動を新たにしたのである。というのは、天皇陛下が歓迎晩餐会に於けるご答辞の最後の方で、「貴国議会が年ごとの8月、我が国の原爆犠牲者に対し追悼の意を表して下さることに対し、国を代表し、とりわけ犠牲者の遺族の心を酌み、心から感謝の意を表します」と、きっちり述べられていたからである。皇室外交の深さというべきか凄さというべきか、このメッセージで私たちは、かの国の並でない親日の深さを改めて思い知らされたのではなかろうか。

今年8月はいつもより注意深く新聞を読んでいたのだが、日経新聞が8/13付「アジア便り」で“「8.6」黙とうするインド”と題する短い記事を掲載した。報じられている通り、まさに世界広しといえども、毎年8月に国会議員が鎮魂の行事を続けている国はそうはない。この行事がどういう事情・背景の下で始まるに至ったのか、詳しく知りたいと思っている。（2014.9.16記）

ピアノ工房見学記

鈴木　長五（高１５回）

猛暑が止まり、秋風の気配を感じる８月３０日の午後、松高東京同窓会幹事４人で、母校保有の世界三大ピアノメーカーの一つであるベーゼンドルファー社製のピアノ修理現場を見学して来ました。そこは埼玉県吉川市にある（株）浜名ピアノ工房（高山知晃社長）です。

訪問して最初に驚かされたのは、やや薄暗い工房の中にぎっしり並んでいる修復中のピアノ群の中から一台を指し示し「これも三大メーカーの一つでスタインウェイです」と社長から説明を受けたときです。ベーゼンドルファーと肩を並べる米国製スタインウェイに遭遇した瞬間、何という素晴らしい環境の中で我が村松高校のピアノは修復されているのだろう！　という感動でした。

松高のピアノ修復作業は極めて順調に進んでいるとの情報は既に耳にしており、９月の中頃に納入される見通しも確認出来ましたが、実際のピアノ修復現場を見るのはむろん初めてで、調律師の発する激しい音や高山社長のお話など真に驚きの連続でした。

心待ちにしていた我が母校のピアノと対面した時には思わず胸が詰まりました。その姿はピアノの外側が丁寧に包装され、蓋が外されてゴールド色の鋳金フレームが輝きを放っており、ピアノに弦が張られる直前の姿だったのです。

弦を張る直前まで修復されたフレーム部

ベーゼンドルファーの秀でた特徴は、何といっても弦の張りの強さだそうで、特にそれは至福の音色と呼ばれる中でも低音部の響きを豊かにするのに役立っています。以前にベーゼンドルファーは、豊かな中低音部と高音のバランスを上手く弾きこなすことが難しいと云う話は聞いていたけど、ようやく張力の強さの意味が理解出来ました。そう思うと、このピアノが今にも弦を張られるのを満を持しながら工房の中で静かに佇んでいるように見えたのです。

強い張力の弦が、長年に亘って弾き続けられることによって、当然そこにはフレームにひび割れや破損などが生じます。しかし、母校のピアノの場合、その破損は微々たるものだと云う話で、これには本当に驚かされました。

このピアノは昭和４年（１９２９年）、村松高等女学校の菅家コウ音楽教諭の熱意によって、町が３，８００円（当時、家が２、３軒建てられた）で購入したものですが、製造年代はおそらく１９２７年で８７年経っていると思われます。高山社長が一目見た時には製造後、５０年か６０年位にしか見えなかったそうです。

ピアノは極端な湿気や乾燥を嫌いますが、特に乾燥に対しては非常に気を遣うそうです。湿気や乾燥については、人間が最も快適と感じられる状態が、ピアノにとっても最適な環境条件であるとのことでした。社長曰く、「村松はおそらく、その気候条件に合っていたのでしょうね」とも……。

次にベーゼンドルファーのピアノ製造に関して言えば、１年以上掛けて全工程を手作業で行うが、手作りの工芸品でもあり、各ピアノに個体差が出るのは致し方なく、それがまた幅広く好みの音色を探す楽しみに繋がるとも云えます。１８２８年から同社がこれまで生産したピアノ台数は約５万台程になりますが、スタインウェイが約６０万台、ベヒシュタインも約２０万台、ヤマハに至っては６３７万台も製造しておりますことを考えれば、如何にその物作りの姿勢が丁寧であるか窺い知れようと云うものでしょう。

修復された鍵盤部

約２時間ほどの工房見学を終えて、社長以下従業員の皆さんに見送られて帰路につきましたが、車中では興奮冷めやらぬ様子で感想を述べ合っていました。私も心の中で「甦れ！　美しいその音色を響かせろ！　」と叫んでいました。

ベーゼンドルファーのピアノ修復記念演奏会

石黒　勝夫（高１４）

１０月１１日（土）、修復記念演奏会開催
～東京同窓会はバスツアーを組んで参加～

母校の新潟県立村松高等学校（校長　今西博一）が所有する世界のピアノの３大名器の一つと言われるベーゼンドルファーのピアノが、昭和４年に購入されてから８５年の歳月を経て劣化したことから、昨年６月、東京同窓会が立ち上がって会員を中心に修復基金を呼び掛けた。同年１０月には同窓会本部も続き、その結果、１年もしない内に修復に必要な基金が集まり、平成２６年１０月１１日（土）、五泉市のさくらんど会館イベントホールにおいて「ベーゼンドルファーピアノ修復記念演奏会」が開催された。

記念演奏会には、東京同窓会から首都圏在住の同窓会員を中心に「観賞バスツアー」を組んで参加するほか、母校の在校生３００名を含めて国内外から総勢７５０名の方々がイベントホール会場一杯を埋め尽くした。

３つの山を越えたピアノ
～荒木会長のあいさつ～

演奏会の開催にあたり、主催者の一人同窓会本部の荒木快英会長から挨拶があり、このピアノは３つの山を越えてきた古い歴史を有することを強調された。

第１の山は、昭和４年に新潟県下で３台目のピアノとして、町が３，８００円で購入したことである。当時の村松町の予算規模は８０，８６４円で、その４．７%に当たる額であった。

第２の山は、昭和２１年５月の村松大火の際、当時の高等女学校の吉井晴夫先生と大塚勇先生と通り掛かった復員兵らしい人の３人で、校舎が燃え始めた火の粉をかいくぐって校庭の真ん中まで持ち出し、火の海から逃れることができたことである。

第３の山は、今回、８６０人からなる同窓生の寄附で修復がなされ、この度の記念演奏会が開催できたことである。

演奏会のプログラム

１部：ピアノ披露演奏会

ピアノ披露演奏会のピアノ奏者は、村松高等学校第２回卒業生で新潟大学名誉教授の佐藤峰雄さんと新潟大学教育学部芸術環境創造課程・音楽表現コース准教授で世界的演奏家である田中幸治さんのお二人。

１．佐藤先生のピアノ独奏

ショパンの前奏曲集Op.28より３曲
- No.11　ロ長調　ビバーチェ、
- No.15　変ニ長調　ソステヌート（雨だれ）
- No.23　へ長調　モデラート

ラフマニノフの前奏曲Op.32より２曲
- No.５　ト長調　モデラート
- No.12　嬰ト短調　アレグロ

２・田中先生のピアノ独奏

シューマンの「森の情景」Op.82　全曲
森への入り口、獲物を狙う狩人、孤独な花、
呪われた場所、ここちよい風景、宿にて、
予言の鳥、狩の歌、別れ

続くお二人のピアノ連弾

シューマンの「こどもの舞踏会」Op.130　全曲
1. ポロネーズ、2. ワルツ、3. メヌエット、
4. エコセーズ、5. フランス風に、6. 輪舞

ブラームスの「ハンガリー舞曲」第４集より３曲
19　番アレグレット、20番 ポコ　アレグレット
21　番ビバーチェ

参加者は、お二人が弾かれるベーゼンドルファーのピアノの音色に聞き入っていた。

２部：村松合唱団の合唱

村松合唱団（２０名）により、次の５曲が合唱（伴奏はベーゼンドルファーのピアノ）された。特に、最後の校歌は全員が立ち上がって、合唱団と一緒に合唱をする感動的なシーンとなった（表紙参照）。

1.Sing	ジョーラ・ポーソ	作詞
	ジョーラ・ポーソ	作曲
	川崎　祥悦	編曲
2.金色の太陽がもえる朝に	やなせ　たかし	作詞
	木下　牧子	作曲
3.手のひらを太陽に	やなせ　たかし	作詞
	いずみ　たく	作曲
4.ふるさと	高野　辰之	作詞
	岡崎　貞一	作曲
5.松高校歌	相馬　御風	作詞
	中山　晋平	作曲

演奏会後の懇親会

演奏会終了後、さくらんど会館の多目的ホールに於いて参加者による懇親会が開催され、演奏されたお二人と合唱団の皆さんを囲みながら感想を述べたり、今後のピアノの有効活用など意見交換をした。

また、同窓生や地元の方々と再会し、懐かしい思い出話しなど、楽しいひと時を過ごしたことは、一生の想い出となった。

ピアノ修復記念演奏会観賞バスツアー

石黒　勝夫（高１４）

８５年ぶりに修復された母校村松高等学校のベーゼンドルファー社製ピアノ。東京同窓会では平成２６年１０月１１日（土）に披露される演奏会に参加しようと、首都圏在住の同窓生を中心に「ピアノ修復記念演奏会観賞バスツアー」（1泊2日）を実施しましたが、参加者数は最終的には2名減り１８名となりました。

演奏会当日、池袋西口公園前を７時半に出発し、１３時半に会場到着。演奏と懇親会終了後、咲花温泉の柳水園へ向かい、夜は演奏会の興奮を想い出しながら楽しい宴会となりました。翌朝、咲花を出発して寺泊を経由し、夕刻、池袋へ無事に到着して解散となりました。

12日朝、柳水園の前で記念撮影

ベーゼンドルファーの音色によせて

平山　誠一（高２２回）

私の手元に松高１００年誌が届いたのは、ちょうど3年前の１０月だったと思う。記念誌の写真集をパラパラ見ていた時ピアノが目にとまり、さらに寄稿文集を読んでいると、何とこのピアノのことが出て来たのである（吉井春夫氏と大塚イミさんの随想文）。女学校時代に購入した古いピアノ「ベーゼンドルファー」とは何物？　ヤマハや河合楽器は音楽に無知な私でも知っているが……。

友人の遠山氏に相談したところ、今は製造していないビンテージのピアノ（機種１６５）、「絶対に復活させるべきだ」とアドバイスを受け、東京同窓会の幹事会に提案し、総会で了承されてベーゼンドルファーピアノ修復基金運動が始まったのである。

平成２３年、山田幸子さんの友人みどり・オルトナーさんが松高でこのピアノを弾いた記事を基金運動がスタートしてから読み、絶対に修復しなければならぬ、と固く決心したことを今でも思い出します。

発表会当日に大塚イミさんとお会いする機会があり、「本当に待ち遠しかったし、冥土の土産になりました」などとジョークを云うくらい感激しておられました。私も本当に良かったとしみじみ思う時間でした。又、山田幸子さんとも懇親会でお話が出来、これも有意義でした。今後もまだまだアドバイスを戴きたいと願っております。

お蔭様で２年待たずに修復金額が集まり、今日の演奏会を迎えられた事は同窓会本部、各支部の皆さん、ご寄付を戴いた方々のご協力なくして出来得なかった事と感謝の念に堪えません。今後は、このピアノの有効活用を皆さんと共に考えていきましょう。

魂がふるえたお二人の連弾！

マサ シュミット（高１４回）

「そこに山があるから山に登る」とある登山家の言葉を聞いたことがありますが、今回のイベントは正にそのように「そこにピアノがあるからピアノを奏でる」と云えるのではないでしょうか。このピアノ修復を企画して下さった同窓会の方々に改めて感謝を申し上げます。

第二に佐藤峰雄氏のように８０歳を過ぎた高齢の方が、あのようにピアノを演奏して下さったことは何と素晴らしいことでしょう。すごく羨ましいやら、また同時に大変励みになりました。第三に、佐藤峰雄氏と田中幸治氏との生の連弾を生まれて初めて聞かせて頂きました。「こどもの舞踏会」の曲などよくラジオでクラシック音楽を聴いていましたが、お二人の息の合った連弾は見事でしたね。改めてお礼を申し上げます。

終わりに、この見事なまでに甦ったピアノが松高生の情操教育に真に役立ちますよう心より願っております。

村松合唱団の皆さん

松澤　綾子（高２２回）

長く古い歴史のあるピアノの音色にホールが一体となって聞き入っていたあの光景が、目を閉じるとまた再び甦ってくるのは私だけでしょうか。こんな小さな城下町で素晴らしい名器と出逢い、更にその演奏まで聴けるなんて、とても贅沢なひと時を過ごさせて頂きました。

我が松高後輩の生徒達が、お行儀良く静かに聞き入っていたことにも感心させられました。これを機に、甦ったベーゼンドルファーのピアノと共に少しでも町興しに繋げて行けたらと切に願っております。

また、東京同窓会が企画したピアノ修復記念演奏会に参加するバスツアーの懇親会では、４０年ぶりに昔の友と再会して懐かしいひと時を過ごせました。音楽あり、懐かしい想いありの充実したバスツアーになり感謝です。

田中幸治先生

佐藤峰雄先生

在校生から感謝の花束贈呈

車窓から　　林　信子（高２５回）

芸術の秋を満喫した１０月１２日の帰路。
和気あいあい、語らいの顔、顔‥‥‥　充実した時を共有したバスツアー。天候にも恵まれ、味覚も大満足。
心地よいピアノの音色が、身体全体に響き奥底に居場所を見つけてくれたらしい。

車窓から観る故郷の秋のやさしい装い。
ススキが手を振り、コスモスが微笑む。ずーと昔々に、遊んだ海水浴場、白い波は、あの頃のまま、あの頃の私あの頃‥‥‥　色々あって私がここに‥‥‥

今、一人の力ではなく、多くの人々の手、手、心と心が結び、母校のピアノに新しい生命力を吹きこんだ。
これから先も澄んだ音色が益々、輝くに違いない。

こんな気持ちを大切にしてくれる若い人達が続いてくれることを信じたい。

同級会に出席して

高岡　光夫（定１２回）

平成２６年３月２５日、田上温泉で昭和３８年３月に卒業した定時制１２回生の同級会が開かれた。上越市から担任だった小竹先生も出席され、卒業生２６名のうち１３名が出席した。

定１２回生は、平成天皇が皇太子の時に結婚された昭和３４年４月に入学し、安保条約反対闘争で世の中が騒然とした昭和３５年、第二室戸台風で講堂が壊れた昭和３６年、創立５０周年記念事業のあった昭和３７年を経て、大変な豪雪の昭和３８年３月に卒業したのである。

卒業以来、５０有余年が過ぎて古希を迎えることから、久しぶりに集まることになった。

小竹先生から、古希の由来について「今から1,２６０年ほど前の杜甫が生きていた時代は、今とは比較にならないほど社会情勢に差があり、当時の平均寿命が４０～５０歳が当たり前だった頃、７０歳と云うのは長命であり、まさに古来稀なりであった。これからも元気に過ごしましょう。」との励ましの言葉をいただいた。乾杯の後、懇談となり「久しぶり」とか「元気だった？　」などの言葉が飛び交い、高校時代に戻ったように近況を語り合った。「暗い帰り道はこわかった。」と云う女性陣の声や「授業中は眠くて困った。」と云う男性陣の話に当時の事が想い出され、過ぎし頃の話や現在のこと、更には、これからの事など話題は尽きず、楽しい時間を過ごす事が出来た。

さて、最近は元気に過ごすシニア世代が必要なものに「キョウーイク」と「キヨーヨー」という言葉を耳にする。「教育と教養」と思いきや「今日、行くところがある。」「今日、用がある。」という事だそうである。我が身を振り返ってみれば、なるほど合点がいく。

このことは、私にとって「今日行くところ」や「今日の用」は、同窓会や同級会に出席することも含まれる。これからも健康に留意して、次回もぜひ出席したい、と思った同級会であった。

2014・３・25　　定12回卒同級会
前列中央・大竹先生　　　於　田上温泉

「英語教育あれこれ」を聴きながら

鈴木　長五（高１５回）

松高の大先輩、小池生夫名誉教授による上記表題の講演を拝聴した。これまで約２００年間に渡る日本の英語教育の歴史を時代のエピソードを交えて話され、未来に向けてコミュニケーション力重視か、英文和訳が大事かに話が及んだ。聴きながら、昔の我々世代は後者だったよなぁと思った瞬間に、郷愁感も伴いながら頭の一部が遠い５０何年もの昔に飛んでいた。

五泉中学校に入学して間もない頃、全学年の校内講演会があり、講師の英語教師が「優秀な先生ではあったが、唯一の難点が発音であった」と言って“sometimes”を「ソメチメス！」と読んだとか。教壇の前の３年生の何人かが「アハハ」と声をたてて笑った。その時の私は無論「サムタイムズ」は解っていない。３年生が羨ましい。自分も早く英語が解りたいとその時だけは強く願った。

３０才頃にニューヨークの街角で傍にいた人に「あの建物は何？」と聞いたら反ってきた言葉が「セレホー」。えっ、そんな単語は知らない。後でよーく考えてみたらそれは「 city hall・シティホール」の事だと気付いた。講演会は英語の実践力のない自分を改めて思い出させられた少し悲しい日であった。

第２１回松高東京同窓会親睦ゴルフ大会

平成２６年４月９日（水）入間カントリー倶楽部に於いて第２１回大会が開催され、１１名が参加した。競技は新ペリア方式で行われ、成績は下記の通り。

成績

優勝：漆原 茂、2位：鈴木 理恵子、3位：金子 鶴男

参加者

亀山　知明、金子　鶴男、吉井　清、鈴木　輝雄
片柳　ムツ、大橋　貞夫、今井　英雄、石黒　勝夫
熊倉　道雄、漆原　茂、鈴木　理恵子

第２２回松高東京同窓会親睦ゴルフ大会

平成２６年１０月９日（木）越生ゴルフクラブに於いて第２２回大会が開催された。石黒久七、五十嵐勝栄の両氏が初参加されたが、新ペリア方式でHDCPを決め、優勝・準優勝は無しとして行われた。

優勝：斉藤 豊、2位：漆原 茂、3位：佐藤 克

参加者

金子　鶴男、片柳　ムツ、大橋　貞夫、今井　英雄
漆原　茂、斉藤　豊、石黒　久七、五十嵐　勝栄
佐藤　克

編集後記

母校のベーゼンドルファー社製ピアノの修復事業は平成二十五年に始まり、二十六年十月には修復記念演奏会を迎え、七百五十名の聴衆を前に感動的な音色を響かせたことは、この事業が大成功であったと云える。母校と地域の活性化が更なる発展を遂げるよう祈念したい。

いま一つは、金子会長が望む他校との交流会を具体的に進め、長岡工業高等学校同窓会の東京支部と昨年三月に初めて話し合いを持ち、六月七日開催の当会定期大会に先方の役員四名の方々をお招きし、更には七月五日開催の長工同窓会東京支部総会に当会も六名の役員が招待されたことにより双方の意思疎通が進展し、九月十九日に両校の第一回交流会を新潟県人会館に於いて開催することが出来た。

双方で十九名の顔合わせとなり、お互いの総会に対し忌憚のない話合いを交わしたり、今後の方針や行事などを率直に議論したり、誠に実り多い会合であった。

この交流事業が順調に発展する事は、当会の活性化に必ず大きく寄与することであろう。会員諸氏のご協力を切に望む次第である。

大橋　記

原稿送付先　大橋貞夫　宛
〒158-0094 世田谷区玉川 4-20-8
E-mail:sadao-o@gb4. so-net. ne. jp

平成２７年2月　第５６号　　　表紙の題名・題字は佐伯益一氏（旧中２７回）の書

発行人　新潟県立村松高等学校東京同窓会　広報委員会

新潟県立村松高等学校　東京同窓会事務局
〒190-0011　東京都立川市高松町 2－37－18
Tel・Fax　042-527-6482（吉井　清）
東京同窓会ＨＰアドレス：http://tokyo.karamatu.com/index.html